



✓ 第32回（2025年度）研究助成 実施要領

研究課題

- 中枢神経系奇形一般の原因・予防法に関する研究
- 水頭症の病態及び治療に関する基礎的・臨床的研究
- 二分脊椎および関連病態に関する基礎的・臨床的研究

助成対象

- 基礎研究分野
 - 臨床研究分野
- 脳神経外科 / 整形外科 / 形成外科 / 皮膚科 / 泌尿器科 / 小児科 / 小児外科 / 神経内科 / 看護科 / 心理科 / リハビリ（理学・作業・言語療法）、発達科学分野など、当該疾患の研究、治療、検査、教育に関わる分野

助成額

- 助成額は1課題につき100万円まで
助成金額は選考後決定します。（申請された金額と同額にならない場合もあります。）

申請期間

- 2025年8月15日～同年10月15日（消印有効）

採否の通知

- 2026年1月末に、申請者に通知します。

応募資格

- 助成金の申請は一般公募にもとづき行います。
- 申請者（代表研究者）の申請時における年齢が45歳未満であること。
- 公的補助もしくは他の民間機関からの助成と重複していないこと。
- 前年度の当財団研究助成金受賞者に限り本年度の応募はご遠慮ください。
- 倫理審査が必要な研究は、2025年12月末日までに内諾あるいは承認されていること。

申請方法

- 申請書は財団所定様式のもので作成してください。（ウェブサイトにて8月5日以降ダウンロード可）
- 申請書の提出、およびお問い合わせ等は下記財団事務局にご連絡をお願いします。

公益財団法人 日本二分脊椎・水頭症研究振興財団
神戸市須磨区磯馴町 4-1-6（〒654-0047）
Tel : 078-739-1993
Fax : 078-732-7350
E-mail : jsatoshi@xa2.so-net.ne.jp
URL : <https://spinabifida-research.com>

第53回日本小児神経外科学会を開催し、振り返って考えたこと

朴 永鉄 (ぼく えいしゅ)

奈良県立医科大学 脳神経外科准教授
奈良県立医科大学病院 小児センター病院教授



■学会のテーマは責任ある均てん化

奈良公園内に位置する春日野国際フォーラム薨(いらか)において、6月6日から二日間にわたり、第53回日本小児神経外科学会を開催いたしました。テーマを、「責任ある均てん化を目指して、和をもって小児神経外科を成す」と決めました。日本は急速に少子化が進んでおり、令和6年の出生数は70万人を大きく下っております。となりますと、小児の脳神経外科疾患は自ずと希少疾患となり、一人の脳神経外科医が治療にあたる経験数はどんどん減少していきます。もちろん、都市部の小児専門の病院で高度な治療を受けることは大切ですが、居住地に戻り日常生活を送りながら、幼稚園や学校に通う子供たちの健康を護っていく使命は地域の医師に委ねられます。特に重要なのは、二分脊椎症などに合併する水頭症に対して乳児期に留置されたシャント(脳室腹腔短絡術)のトラブルにより、急激に体調が悪化した際の対応です。シャントのトラブルは、いつ何時にも発生する可能性があります。適切な判断と迅速な対応を行わないと、昨日まで元気であったお子さんたちが生命を失う危険性があることを、脳神経外科医はしっかりと認識する必要があります。都市部の小児専門病院で初期治療とその後のフォローがなされていても、シャントトラブルは緊急事態であると受け止め、即座に治療に取りかからねばなりません。時には、都市部の小児病院へ搬送を強く希望する保護者の意向に反してでも、目の前のお子さんたちを救わなければなりません。その思いが、まさしく「責任ある均てん化を目指して、和をもって小児神経外科を成す」なのです。

私自身も多くのシャントトラブルのお子さん達を診て参りました。手術室に入る直前で呼吸停止が生じ、あと数分治療が遅れていたら亡くなっていたかも知れないという危うい状況も経験しています。二分脊椎症のお子さん達の多くは、新生児期にシャントが留置されています。1歳を超えるとシャントに関連した合併症の頻度は大きく減りますが、成人になってもシャントチューブの閉塞や断裂などのトラブルは、決してゼロにはなりません。

二分脊椎症のお子さん達の医療的ケアにおいては、出生直後から乳児期までは脳神経外科医の“出番”は多いのですが、学童期になると泌尿器科や整形外科の先生方の診療に重点が移ります。ややもすると、脳神経外科への受診が疎となり、いつの間にか途切れてしまうこともあると聞いております。年に1度か2度は受診を必ず勧め、シャントバルブのチェックと、シャントトラブルの可能性を毎回説明することが重要です。そして、“つながり”を持ち続けることが不測のシャントトラブルの対応に極めて大切となります。

■我が小児神経外科医人生を振り返れば

私は脳神経外科医を自らの意思で志しましたが、小児を専門とする考えはありませんでした。医局の都合で、突然に小児神経外科を担当することになり、周囲には教えを乞う小児神経外科を専門とする先輩は誰一人とおらず、毎日が悩み、もがき苦しむ日々でした。早々に、二分脊椎症(脊髄髄膜瘤)のお子さんの治療を担当することになりました。修復術は一度しか観たことがありませんでしたが、専門医試験の受験の際に勉強した教科書を何度も繰り返し読み返し、また、他大学へ出向した際にたまたま数例の手術経験のあった先生の指導もあり、どうにか問題なく修復術を終えることができました。

しかしです、問題は水頭症の手術治療と管理でした。成人例で100人以上はシャント手術の経験があったので、乳児であっても難なく出来るであろうと安易に考えておりました。当然ですが、大きな誤りでした。創部から髄液が漏れる、脳室管が閉塞する、挙句にはシャント感染を合併する、何度も何度も水頭症に対する手術が必要となりました。本当に申し訳ない気持ちと、自分の未熟さ至らなさが情けなくて、手術の説明の際には涙が止まりませんでした。でも、本当に泣きたいのはご両親であり、何度も辛い手術を受けなければならない当のお子さんです。どうしたら良いか分らぬまま、一人悩み続ける不甲斐ない主治医でした。もうこれ以上の手術トラブルを起こしてはならないと心に強く誓い、兵庫県立こども病院の坂本敬三先生(故人)、大阪市立総合医療センターの坂本博昭先生をはじめ、多くの先生方に食らいつきながら、シャント手術や管理のノウハウをいろいろと教えていただきました。どうにかシャントトラブルから脱することが出来ましたが、手術回数は半年間で10回を超えておりました。そのお子さんも今では立派に成人しています。毎年年賀状を交換していますが、ある年は晴れ着姿がプリントされていました。その姿を見て、大変な苦勞をかけてしまった自責の思いと、ご本人を含め家族皆で頑張ってきた年月を慮り、胸がつまり目頭が熱くなりました。病院で私を見かけると、「朴先生!」と、いつも元気な声でニコニコしながら呼びかけてくれます。小児脳神経外科医冥利につきます。



■小児脳神経外科医は、二分脊椎症のお子さんの治療とともに成長する

われわれは外科医ですので、手術の知識や技術を磨くことを日々求められます。しかし、小児神経外科医として成長するには、多くの二分脊椎症のお子さんたちの治療に真摯に向き合うことがとても大切と考えています。幼児期から学童期、さらには、青年期から成人期に至るまでを、一緒に“伴走”することで、われわれも多くを気づき学ぶことになります。

もちろん、医療としての側面はあります。先ほど述べたシャントトラブルの対応以外には、脊髄再係留症候群（乳児期の手術した部位に癒着が生じ、成長とともに脊髄が牽引されて機能障害を生じる）としての、脊柱の変形や膀胱機能障害の出現に適切に対応することが脳神経外科医の役割です。しかし、医療以外の多くの問題や課題に困窮したり悩むお子さんたちにも、積極的に関わることが大切です。幼稚園や小学校入学に際して、車椅子移動や導尿管管理などを理由に断れたり、周囲の者から心無い言葉をかけられた際には、一緒に憤り、悩み、そして何とか解決するために、多くの書類を作成したり担当者との面談も厭うてはなりません。この様な状況では、小児科の先生方より脳神経外科の先生方が“活躍”することが多い様に思います。われわれの方が、おそらく“戦闘能力”が高いのでしょう。

ある日、他院からフォローのみ依頼を受けた成人された二分脊椎症の方が、障がい者雇用枠で就労しているにもかかわらず、上司から不当な対応を受けて離職せざるを得なくなった話を定期外来受診の際に聞いて、私の方が熱くなって憤慨してしまい、「今から、会社と労働基準局に私が電話して抗議する」と言い出すと、「先生、止めて下さい。新たな仕事先を見つけられなくなってしまう…」と、ご本人からなだめられました。少なからずの二分脊椎症のお子さんたちの治療に携わっている脳神経外科医は、出生から成人に至るまでの間、どれだけお子さんたちが頑張ってきたか、そして、親御さんたちのご苦労がどれ程のものであるかを、痛いほど理解しております。先ほどの方は、次回受診の際には、無事に再就職出来た様でひと安心でした。仕事場で辛い思いをされたことを切々と話される方は、他にも何人もおられました。

脳神経外科医に限らず、二分脊椎症のお子さんたちの治療に携わる医療従事者は、自らの専門領域の診療活動に限定することなく、毎日を生き生きと暮らし、成人になるまでを一

緒に“伴走”するサポーターでもあるべきと考えています。

幼稚園から小学校までは、やんちゃなくらいよくお話してくれた〇〇君、中学校に入りすっかり口数が減り元気がありません。私は大学病院での勤務は残り数年です。「学校で何か嫌なことでもあるのか？先生は、〇〇君が大人になるのを見届けて引退する。」と、毎回励ましていますが…。

■小児神経外科医としての心構え

私自身も、自分の対応が果たして正しいか迷うことが多々あります。その際には、古いドラマですが「男たちの旅路」シリーズの「車輪の一步」（山田太一 脚本）を繰り返し観る様にしています。われわれが為すべきことを、明確に導いてくれています。

皆さんが、懸命に頑張っています。障害を有していても、決して笑顔を失うことがないように、われわれも全力で応えし続けねばなりません。

私が考える小児神経外科医に求められる資質を述べます。

- 1) 病気に苦しむお子さんたちと親御さんたちへの深い愛情
- 2) 治療に対する強い責任感
- 3) 怯まぬ努力と弛まぬ情熱

この3つを忘れず、これからも二分脊椎症のお子さんたちの診療にあたって参ります。

■余談

私は、2006年から2007年まで、ローマカトリック大学小児神経外科へ留学し、欧州の小児神経外科学会の重鎮 Concezio Di Rocco 教授の元で多くを学び研鑽を積みました。Di Rocco 教授は、日本から来た私に、本財団の初代会長の松本悟先生（故人）のことを度々触れられ、深く尊敬している友人だとお話されておりました。

今回、私がこの様に寄稿するになりましたこと、とても感慨深く、また光栄に思っておりますことを申し添えさせていただきます。

最後になりますが、第53回日本小児神経外科学会開催にあたり、日本二分脊椎・水頭症研究振興財団より助成をいただきました。この場をお借りして、深く御礼を申し上げます。

末筆ではございますが、本財団の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

事務局からの **おたより**

猛暑日が続いております。以前に比べて雨の降る日が少なくなったように感じます。その分短時間にまとまった大雨が頻繁に降ります。突然街中のマンホールの蓋が吹きとんで水が噴き出したり、地下街が水浸しになったり、ビックリするような被害が起こっています。クマが人里に出没して人が襲われるというニュースも最近よく耳にしますが、これも人口減少の加速と気候変動の進行が関係しているのだそうです。

皆様、お変わりありませんか？それにしても毎日暑いです。6月から7月にかけての財団活動をお知らせします。

●第32回 2025年度研究助成実施要領

今年度の研究助成実施要項をお知らせします。8月5日にはウェブサイトの詳細を掲示させて頂く予定です。

●第53回日本小児神経外科学会

6月6-7日、朴永銖先生（奈良県立医科大学脳神経外科准教授・同大学病院小児センター病院教授）主宰による第53回日本小児神経外科学会が奈良で開催されました。

朴先生にご寄稿をお願いしたいと前々から思っていましたので、学会開催の機会にお願いできたことは本当に有難いことでした。

学会会場は春日野国際フォーラム麓。奈良が能楽発祥の地ということで会場には立派な能楽ホールがあります。能舞台は尾州檜と台湾檜が使われているようで、能舞台の形式が確立した室町時代の様式に合った格調ある設えです。その能舞台に立たれた朴会長から「病気と必死に闘っている子どもたちへの深い愛情と強い責任感を抱きながら弛まぬ努力と怯まぬ情熱をもって治療を行うことが、われわれ、小児神経外科医の責務と考えています」という開会のご挨拶がありました。

討論や質問をしておられる朴先生はとても厳しそうですが、ご寄稿の内容やお写真からうかがえる通り、患者さんのこととなると、とても熱くて、優しいお人柄の先生です。

学会は盛会に行われ、会場には長嶋財団会長、坂本博昭理事、伊達裕昭理事のお姿もありました。

●日本小児神経外科学会

日本小児神経外科学会は、小児脳外科分野において最も歴史のある学術集会です。その設立については、設立準備委員でいらした佐藤修先生（東海大学名誉教授／元財団選考委員）がまとめておられますので、参考にさせていただきます。

きながら記します。

日本小児神経外科学会は、研究会として発足しましたが、1972年8月4日、故松本悟先生が東京迎賓館で設立準備のための会議を招集し、全国から19名の先生方が出席されました。議事録には「小児神経外科学分野を長期かつ一貫して眺めるに相応しい研究、討論の場としての存在とする」という研究会のあり方や第1回目の研究会は川淵純一先生（群馬大学）が1973年春、大阪で開催されることに合意されたことなどが記されています。

1975年から学会機関誌「小児の脳神経」が発行され、1997年、「研究会」から「学会」に発展、名称を変更し、2012年には一般社団法人に移行、新井一先生（学校法人順天堂理事長補佐・順天堂大学医学部脳神経外科名誉教授／財団評議員）が初代理事に就任され、現在、四代目理事長、埜中正博先生（関西医科大学脳神経外科教授）へ引き継がれています。

●表紙の写真：奈良公園の鹿

第53回日本小児神経外科学会の会場へ行く途中、奈良公園内で撮影した鹿の親子です。奈良公園に生息するシカは国の天然記念物に指定されている野生動物で、飼育されている動物ではないので飼主はいません。1300年以上前から生息しているようで、春日大社の神の使いである「神鹿（しんろく）」として大切に保護されています。

シカが横断歩道手前にいると、タクシーの運転手さんはシカが道路を渡りきるまで停止。「シカも交通ルール、守るんですね」というと、運転手さんは笑っておられました。

自然災害なみの猛暑が続いています。体調に気をつけなてお過ごしください。引き続き財団活動のご支援をよろしく申し上げます。 九十九そのえ（7/30）



春日野国際フォーラム麓 能楽ホール

Contents Brain and Spinal Cord "B & C" Vol. 32 - 2

- P1 第32回研究助成実施要領
P2 第53回日本小児神経外科学会を開催し、
振り返って考えたこと …… 朴永銖

発行日：2025年7月30日
発行者：長嶋 達也
編集者：九十九 そのえ

公益財団法人 日本二分脊椎・水頭症研究振興財団
〒654-0047 神戸市須磨区磯馴町 4-1-6
Tel：078-739-1993 Fax：078-732-7350
E-mail：jsatoshi@xa2.so-net.ne.jp
<https://spinabifida-research.com>